

2020年9月10日第65回運輸政策セミナー  
「Next インバウンド」シリーズ vol.2 宿利会長 開会挨拶

皆様こんにちは。運輸総合研究所会長の宿利正史です。

今回も多くの皆様にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。7月下旬からオンラインを活用しながら少しずつ再開してまいりました私どもの活動も、早いもので今回が4回目となります。

前回は、8月26日に運輸政策コロキウムを開催し、当研究所の藤村客員研究員より「新型コロナウイルス感染症による航空業界への影響およびその対応策」というテーマで講演を行いました。会場開催とライブ配信という、ハイブリット型の初めての試みでしたが、海外からの参加者も含めて、約700名という大変多くの皆様にご参加いただきました。多くのご質問やご意見をいただき、活発な中身の濃いコロキウムとなりました。

その前の8月7日には、運輸政策セミナー「Next インバウンド」シリーズの第1回を初めてライブ配信にて開催しましたところ、同じく海外からの参加者も含め、約300名の皆様にご参加いただきました。

引き続き、なるべく多くの皆様にご参加いただけるよう、テーマや開催方法を工夫しつつ取組みを進めていきたいと思っています。

さて、本日は「Next インバウンド」シリーズの第2回をライブ配信により開催します。新型コロナウイルスによるパンデミックにより状況が一変したインバウンド観光について、今後その復活・再成長を目指すためには、私は、コロナ渦の中で顕在化する社会変容を踏まえた、持続可能な、賢い戦略や施策が必要になると考えています。この「Next インバウンド」シリーズは、「ポスト・コロナ」の時代において必要となる新たな観光・交通戦略や施策についての有益な示唆や手掛かりを与えていただける方々を順次お招きして、皆様と一緒にこのテーマを考えていくものです。

さて、本日の講師は、Visit Japan 大使の横江さんに、大阪から参加していただきます。私が横江さんと初めてお会いしたのは、今から25年前、1995年のことです。この年の7月に、私は、鉄道の運賃政策や民営化後まだ日も浅いJR各社の監理などを担当する運輸省（当時）鉄道局の業務課長に着任しました。時あたかも、鉄道の運賃のあり方が公共料金改革の一環として大きな議論となっており、また経営が悪化してきたJR北海道、四国、九州の運賃を国鉄改革後初めて改定するかどうかを検討しなければならない待ったなしの状況にありました。

一方で、この年の1月に阪神・淡路大震災が発生し、大きな被害を被った阪神間の鉄道輸送サービスの復旧もまた喫緊の課題となっておりました。そんな時に阪急電鉄で活躍しておられた横江さんとお会いし、鉄道利用者の利便を第一に考え、顧客価値を高め続けることで、鉄道の強みである外部経済効果の最大化を目指し、さらに交通ネットワークの使い勝手を良くしていくことで、ますますその効果を多様化・広域化していくという、横江さんのいわばライフワークの原点に接することになりました。今でも強く印象に残っています。

横江さんからは、この取組みの進化・発展の過程におけるご経験を皆様と共有していただきながら、現下の未曾有の危機を乗り越えた先にある「ポスト・コロナ」の時代に求められる観光・交通戦略や施策についてご示唆をいただき、皆様と一緒に考えていきたいと思っております。

本日は、横江様からのご講演の後、当研究所の通例の形どおり、コメントータとして文教大学の小島教授からコメントをいただきます。その後に山内所長がモデレーターとなり、対談及び皆様との間での質疑応答という流れになっております。小島教授は大学で教鞭をとられる前は、民間企業や国土交通省の研究所でお勤めになられ、大変幅広いご経験をお持ちです。本年4月からは、当研究所の客員研究員として、私どもと一緒に活動を始めており、本日が初めて登場していただく機会となります。

最後に、本日のセミナーが、ご参加いただきました皆様方にとりまして真に役に立つものとなりますことを期待して、私の冒頭の挨拶といたします。

本日は誠にありがとうございます。

(以上)